

聖日礼拝説教要旨 【2012年10月28日】

「心の深みまで新たにされて」

詩篇
エペソ人への手紙

第51篇5節～11節
第4章17節～24節

説教 岡村 恒牧師

キリストの使徒パウロは、私たちに語りかけます。『あなたがたがキリスト・イエスから学んだ真実とは何か。もう既に、滅び行く古い人を脱ぎ捨てて、永遠の命を持つ新しい人を着た。この事実ではないか。』と。

「そこで、わたしは主にあっておごそかに勧める。」(17節)と勧告するように語りますが、1章からずっと読んで来ると、もう既に罪を赦され、永遠の命を与えられている、という福音が力強く響いています。

異邦人がむなしい心で歩くようすを真似する必要などない。そう語りかけられているエペソ教会の人々は、様々な文化と宗教が入り交じる町で、人間の知恵や知識に取り囲まれて生きていました。しかし立ち止まって見ると、この世の生活がむなしく、空っぽであることに気づかされます。「知力は暗く」、「心の硬化」とは、いずれも神の御心に対してカチカチの石のように無感覚になっている私たちの罪の姿を現しています。私たち人間は、詩篇51篇に描かれているように、生まれながらにして罪人なのです。神の御心に無感覚で、「神のいのちから遠く離れ」、「ほしいままにあらゆる不潔な行いをして、放縦に身をゆだねている」(18節、19節)のです。神様が私たちに何を与えて下さり、何を望んでおられるのか気づくことさえできずに、放縦に支配されるようにして生きています。

しかし、主イエス・キリストの言葉に出会った者は、それ以前のように、何も聞かなかったかのように歩むことができなくなります。真理に触れてしまうからです。神の言葉には力があり、人を捕らえ、造り変えてしまうことができます。聖書の御言葉は、ただキリストを信じる信仰のみによって罪を赦され、神の子と呼ばれるようになる、とはっきり語っています。

今から495年前、1517年の10月31日、1人の修道士が、この救いについての質問をラテン語で紙に記し、ドイツ・ヴィッテンベルグ城教会の扉に打ち付けました。当時の作法で、公けに討論を求める掲示の仕方でした。

人が救われる、というのはいったいどういう仕方で実現するのか、という問いが、改めて教会で問われました。この時、マルティン・ルターという信仰者は、聖書を丁寧に読み直して、

ただ信仰のみによって救われる、という真実を読み取りました。ただ神の恵みによって罪を赦され救われる、という福音を再発見しました。

やがて、確かに聖書にそう書いてある、ということを知った人々が、教会を、礼拝を新しく変えて歩み始めました。礼拝(service)とは、人間が神様に仕えることではなく、神様が私たちのために何をして下さったのかを確認し、感謝を捧げることだ、ということがはっきりしたのです。大阪教会も、宗教改革によって生まれた福音主義教会の伝統を受け継いでいる教会です。

ただ主イエス・キリストの犠牲によって罪を赦されて新しい命を頂くことができるということ信じ、告白して洗礼を受ける時、人は、心の深み(深淵)まで新しくされます。自分自身でさえ顔を向けたくない心の一番の深みを、そこに沈み溜まった罪の汚れまでも、イエス・キリストの血は洗い清めて下さいます。誰でも、心の深みまで新しく造り変えられて、新しい人として生き始めることができます。この全てが、私たち人間の側の犠牲によってではなく、ただ神様の憐れみだけによって実現しました。だからこそ、この知らせは《福音》(良い知らせ)と呼ばれています。

私たちが主イエスによって学んだ真理とは、ただ神様の憐れみによって、信仰のみによって救われるという真理です。救われた者の生涯は、ただ新しくなる、というだけではなく、終わりの確かさを知っている者の歩みとなります。

先週、この聖堂で一人の姉妹を葬る、葬りの式が営まれました。姉妹が書き残して下さった文書の中に、植村正久という明治期の牧師が、自分の娘を失った時に深い慰めを得た詩が紹介されています。ストックという人の『天に一人を増しぬ』という詩です。地上の家からは一人を失ったが、永遠の命を生きる天に、神の家に一人を加えた。とはっきり宣言し、《主イエスよ、天の家庭に君と共に坐すべき席を、我らすべてにもあたえたまえ》と祈ります。誰でも、主イエスを信じる者にはこの確かな希望が与えられます。心の深みまで新しくされて、新しい人を着て、やがて終わりの日には、天の家庭に座す希望です。

(記 岡村 恒)